

# Hawthorne の小説における「自然」

—An Introductory Comment—

松 山 信 直

## I

Hawthorne の時代のアメリカ作家達が、「自然」に深い関心を持っていたことは衆知の通りであって、R. W. Emerson や H. D. Thoreau などの「自然」に対する態度や自然観は、すでに古くからさまざまに論じられている。ところが、彼等の同時代人であり、彼等に劣らないほど「自然」に対して深い関心を持っていた Hawthorne となると、Emerson などの陰にかくれた訳ではないのだろうけれども、「自然」という観点からの研究は非常に少なく、まだ多くの問題が未解決のまま残されている。<sup>①</sup>

現存する Hawthorne の Notebooks をみれば、彼が「自然」の外面や、現象としての「自然」に興味を持っていたことが知られるばかりでなく、Concord の Walden Pond の秋の情景をみて “moral effect”<sup>②</sup> があるかどうかを考えているように、「自然」から何か精神的・道徳的意味を引き出そうとしたり、「自然」そのものの意味を考えようとしたことも明らかである。*The Scarlet Letter* の Introductory として発表した “The Custom House” の一節で、Hawthorne は、Concord の Old Manse に住んでいた時代には「自然」との接触が深かったが、Salem に出て来て税関につとめた時代には、その接触がうすれたとのべて、次のように書いている。

Nature, — except it were human nature, — the nature that is developed in earth and sky, was in one sense, hidden from me; and all the imaginative delight, wherewith it had been spiritualized,

passed away out of mind.<sup>③</sup>

「自然」との接触がうすれたため “imaginative delight” がなくなった、という言い方は、ロマンチズムの時代の作家達にとっては必ずしも目新しい表現ではない。ところが、ここに “wherewith it [Nature] had been spiritualized” とあるように、Hawthorne の想像力は物質的・現象的な「自然」を “spiritualize” することによるこびを見出していたというのである。

“Spiritualize” とは、Hawthorne にあっては、精神的観念的なものとの類似 (“resemblance,” “analogy”) を求める、精神的道徳的意味を見出す、さらには、理想化・観念化する、といった含みがある。ところが、これに類する「自然」の spiritualization は、Emerson にも、Thoreau にも、さらには Herman Melville においても認められるのであって、必ずしも Transcendentalist たちだけに限らず、もっと広く、当時の作家、思想家に共通する対「自然」の態度の一つ、多分にキリスト教的発想にもとづいた態度、ということができよう。Puritan における「自然」の spiritualization について、Perry Miller は次のようにのべている。

Every particular creature was held to contain a moral import over and above the scientific laws of its particular nature, and while a Christian should study the laws, he should endeavor to “spiritualize the most Earthly objects that are before him,” because there are “Numberless Lessons of *Morality*, which by the Help of the *Analogy* between the *Natural* and *Spiritual* World... we may learn from them.”<sup>④</sup>

この「自然」の spiritualization は、17世紀の Puritan たちの説教や詩の、比喩的表現と、時には、発想そのものを著しく特色づけたし、また Emerson や Thoreau においては、随想や評論や詩を通して symbolism の理論と実践へと展開した。

Hawthorne の小説においても、この伝統をひく「自然」の「spiritualization」は充分認めることができる。しかも、虚構の fiction が舞台になるため、Emerson や Thoreau とは異った面での期待が Hawthorne にある。

Cooper や Melville の小説と較べてみると、Hawthorne の小説では、setting の関係もあるけれども、いわゆる、写實的絵画的自然描写は非常に限られている。「自然」の情景描写にかけては、Cooper や Melville の方が量的に多いし、また、はるかに巧みであるとさえいえる。湖と川をとりまく原始林の描写や、広漠とした大洋の動と静の情景などは、Cooper や Melville の作品においては、それ自体の美しさと価値をもっているのみならず、作品の意味を構成する不可欠の一部となっている。Hawthorne の小説にそのような自然描写を多く期待することはできない。ところが、それでいて Hawthorne の小説には、自然物の image、つまり、花とか鳥とか日光などの external nature の具体的存在物の image が非常に豊富に用いられている。さらに、擬人化された「自然」がしばしば引き合いに出されてもいる。しかも、自然物の image の多くは比喩的表現として使われ、作品全体の意味を支える土台となっており、擬人化されて言及される「自然」も、自然物の image と平行して、作中人物や、出来事の意味に深くからんできている。また、分量的にそう多くない写實的な自然描写も、情景そのものを絵画的に提示する働きよりは、人物や plot の意味を示唆する機能的働きの方がつよい。

これらのことからして、Hawthorne の小説における「自然」で問題になるのは、単なる絵画的情景描写としてとらえられる「自然」よりも、“spiritualize” されている「自然」、**「自然」の spiritualization** である、ということが出来る。もちろん、Hawthorne における「自然」の spiritualization は、必ずしも、自然現象に神の Providence を読みとったり、自然現象と精神的道徳的価値の類似を didactic に求める——Puritan 達の

場合はほとんどこれらに限られていた——ことだけに限定されるのではない。上に触れたような、自然物が抽象的意味の metaphor や symbol になっている symbolism も含まれてくるし、さらに、「自然」が理念的にとらえられて、独自の存在としての「自然」の意味そのものが精神的道徳的価値となって、作品の枠組の重要な一部となっている場合も含まれてくる。

この大きな「自然」の spiritualization という主題を今ここで詳細に論じる余裕はないが、この小論においては、*The Scarlet Letter* から始まる Hawthorne の四大小説にひとまず範囲を限って、これらの作品中で扱われる「自然」の性格と意味を検討し、それらが作品の枠組の一部になっている様相を、一部の人物を中心にして概観することにしたい。従って、ここで試みようとしているのは、Hawthorne の小説への一つのアプローチであって、「自然」の観点からなされる個々の作品論<sup>⑥</sup>でもなければ、自然思想の研究でもない。

## II

Hawthorne にとって、「自然」は人間の情感との脈絡をたたれて全くの具象になりきった世界ではなく、具象ではあるけれどもまだ人間が親密さを感じ、人間との呼応を読みとることのできる世界だった。Hawthorne が「自然」をしばしば擬人化して女性扱いしたのも、決して因襲的技法への追従ではなく、「自然」が単なる外的な、静的な、冷酷な情況と感じられなかったからに外ならない。

しかしながら、この人間と呼応する「自然」の対人間関係は、必ずしも固定していたのではない。たとえば、次の二つの文章をくらべてみよう。

But, on one side of the portal, and rooted almost at the threshold, was a wild rose-bush, covered, in this month of June, with its delicate gems, which might be imagined to offer their fragrance and fragile beauty to the prisoner as he went in, and to the condemned

criminal as he came forth to his doom, in token that the deep heart  
of Nature could pity and be kind to him.<sup>⑦</sup>

However the flowers [Alice's Posies] might have come there, it was both sad and sweet to observe how Nature adopted to herself this desolate, decaying, gusty, rusty, old house of the Pyncheon family; and how the ever-returning Summer did her best to gladden it with tender beauty, and grew melancholy in the effort.<sup>⑧</sup>

はじめの方は *The Scarlet Letter* の第一章からとったもので、牢獄の入口に咲いている野バラを描いた箇所である。あとの方は *The House of the Seven Gables* からとったもので、Pyncheon 家の屋根の隅に咲いている花に言及したものである。はじめの文章では、罪人に対する「自然」の同情が語られているが、あとの文章では、よろこびを与えようとする「自然」の努力が空しく終わっているといわれている。このように、「自然」は人間より大きな存在ではあるけれども、Hawthorne の小説では、「自然」の同情やめぐみを人間が受ける場合と、うけ得ない場合の二つが設定されているのである。だがこのような設定は、どちらの場合にしても、「自然」と人間が動的な関係を持っていてこそなりたつ設定である。

「自然」の同情やめぐみを受ける場合と、うけ得ない場合の違いがどこから生じてくるのかは、「自然」の性格を検討していく過程のうちに、おのずから明らかになると思う。しかし、その「自然」が、時として伝統的な宗教的発想によってとらえられている場合があることに、今一言ふれておかなければならない。というのは、Hawthorne は理念的にとらえた「自然」（いわゆる *natura naturans*）を神と同一視することは決してなかったにしても、現象としての「自然」の背後に神の意志を読みとるという最もありふれた *spiritualization* の発想を決してすてていないからである。つまり、非常に極端な言い方をすれば、創造主である神の意志が、創

造物である「自然」を通してあらわれる、とか、「自然」に Providence を読みとる、といった場合が時折みうけられるからである。この宗教的発想が自然現象をとらえて、文字通りに Providence を語る場合には、次の例のように、非常に因襲的で、単純で、文学的とさえ言えないようなことになってくる。

After all, there need be no question why the bees came to that one green nook, in the dusty town. God sent them thither to gladden our poor Clifford! They brought the rich summer with them, in requital of a little honey.<sup>⑨</sup>

ところが、このような Revelation through Nature,あるいは、Providence in Nature と呼ばれるものが、context から考えて、比喩的に表現されている、仄めかされていると推論できるような場合は、はなはだ微妙な解釈の問題が生じてくる。たとえば、先に引用した *The Scarlet Letter* の牢獄の入口に咲いているバラについて、「自然」の同情だけに留まらず、「自然」の背後にある神の広大な愛も意味されていると考えるような場合である。Hawthorne はこのバラが Anne Hutchinson の足許から生じてきたとも信じられると書いていて、Puritan に迫害された Hutchinson を“sainted”<sup>⑩</sup>と形容している。あきらかにここには、罪に対してのみならず、罪人に対しても厳しかった Puritan 達の偏狭な厳格さを批判する含みが感じられるのであって、このバラに、Puritan の偏狭さと極めて対照的な神の広大な愛が仄めかされていると論じることが、決して不可能ではない。

けれども、そういう可能性が作品解釈の上で充分ありうることを認めた上で、私は独自の存在としての「自然」が、ある意味や特色をもって人間にドラマチックに対して、という第一義的な表現形式に注目したい。というのは、たとえ自然現象が宗教的価値あるいはその他の価値のメディアとなっていて、その表現は独自の存在としての「自然」のもつ価値と人間との関係に立脚しているからである。たとえば、先の牢獄の傍のバラ

は、第一義的には人間に対する「自然」の愛、同情を示すものとして描かれている。ここから第二義的に、神の愛という意味をひき出す可能性が生じているのである。従って、独自の存在としての「自然」のもつ価値や性格を検討してこそ、その後の第二義的段階が可能となるのである。

### III

Hawthorne の小説における独自の存在としての「自然」のもつ価値、もしくは、「自然」に付与されている性格、特色は、さまざまな角度から抽出してみることができる。たとえば、*The Scarlet Letter* の終り近くの、いわゆる森のシーンをみてみよう。Hester が Dimmesdale に森の中で会って Chillingworth の正体をつげ、彼の手からのがれるために二人で New England から逃げ出すことを語るシーンである。

Dimmesdale に会った Hester は “What we did had a consecration of its own. We felt it so! We said so to each other!”<sup>⑩</sup> といって、自分達の行為（姦通）が二人の間では決してみだらなものでなかったことを再確認し、Dimmesdale とつれだつて逃げだす心準備のあることを語る。そして、さらに、罪のしるしの緋文字を胸からとり外し、髪の毛をつつんでいた帽子を脱いで髪をだらりとたらし、すると、彼女の女らしさ、若さ、豊満な美しさがいっときによびもどされ、陽の光が今やあたり一面に輝くのである。

ところが、いかに Puritan のおきてが厳しくても、また Chillingworth がいかに悪魔的な意図をもっている、さらに、Hester の愛がいかに純粹なものとして肯定されても、この時の二人の integrity にはまだ多くの欠ける点がある。Dimmesdale は罪をかくしていることの解決を逃げ出すことによって回避しようとしているし、Hester は Pearl に緋文字の意味を教えようとしもしないし、Dimmesdale が何者であるかを告げる気持も持っていない。しかるに、森にやってくる途中では Pearl にだけてり輝いて、

一向に Hester にてりつけなかった日光が、今やあたり一面にさんさんと輝くというのである。

そうしてみるとこの日光は、Hester が牢獄から引き出されて処刑台の上に立った時にてりつけた、あの、真実を明らかにし、罪人を社会にさらす日光（第2章および第3章参照）とは意味を異にするもの、宗教的・道徳的価値のメディアになっている「自然」とは全然別の「自然」の一面、ということができる。Hawthorne はこの日光に言及して次のように書いている。

All at one ... forth burst the sunshine, pouring a very flood into the obscure forest, gladdening each green leaf, transmuting the yellow fallen ones to gold, and gleaming adown the gray trunks of the solemn trees ....

Such was the sympathy of Nature — that wild, heathen Nature of the forest, never subjugated by human law, nor illumined by higher truth — with the bliss of these two spirits!<sup>⑩</sup>

ここに言われている「自然」は、あきらかに宗教的道徳的価値とは無縁の、独自の存在としてとらえられた「自然」の一面である。Puritan 達にとってそのような「自然」は immoral であり、heathen の世界であって、救いのない悪の世界であったが、一方、Puritan の価値観にしばられない人々（たとえば、Hester や Pearl）にとっては、この「自然」は掟や社会的慣習からの freedom を意味していた。こういう「自然」が *The Scarlet Letter* では Puritan の世界と著しい対照をなし、非 Puritan、反 Puritan の世界の特徴となっており、この作品の意味の構造の一部になっていることは否定できない。<sup>⑪</sup>

けれども、Hawthorne の小説において「自然」は、*The Scarlet Letter* の Puritan 達の見方と同じように、すべて悪と見做されていると結論することはできない。「自然」は単に道徳や宗教の光にてらされていない状態



であって、non-moral, un-religious の状態ではあるけれども、決して immoral, irreligious というのではない。次に引用するのは、*The Marble Faun* に出てくる神話的存在の Faun の半ば動物的な像についての描写の一部である。

Perhaps it is the very lack of moral severity, of any high and heroic ingredient in the character of the Faun, that makes it so delightful an object to the human eye and to the frailty of the human heart. The being here represented is endowed with no principle of virtue, and would be incapable of comprehending such; but he would be true and honest by dint of his simplicity.<sup>④</sup>

この文章は、Faun の性格における moral severity の欠除、高邁さの欠除を指摘しているが、必ずしも、この半人半獣の自然的存在を、悪だとか不道德だときめつけているのではない。「自然」は本来人間が作った宗教や道徳とは異なるレベルにあるのであって、宗教的、道徳の見方からすれば悪と映ることがあるかもしれないし、時には不可解と思われることがあっても、本来的には独自の規範にもとづく一貫性がある。

*The Scarlet Letter* の Pearl と *The Marble Faun* の Donatello の二人は、あとで再び触れるけれども、Hawthorne の小説における典型的な「自然」人であって、「自然」の規範にもとづく一貫性はあるが、社会の掟や慣習にしばられない freedom を特色としている。彼等は宗教的、道徳的、社会的見方からみれば全く不可解であるが、それでいて、必ずしも悪だ、不道德だ、反宗教的だというのではない。Chillingworth と Dimmesdale が Pearl を観察して言った次の言葉は、「自然」に対する典型的な宗教的、道徳的、社会的視点を示している。

“There is no law, nor reverence for authority, no regard for human ordinances or opinions, right or wrong, mixed up with that child's composition .... What, in Heaven's name, is she? Is the imp

altogether evil? Hath she affections? Hath she any discoverable principle of being?"

"None, —— save the freedom of a broken law....Whether capable of good, I know not."<sup>⑤</sup>

すでに明らかなように、「自然」は宗教、道徳、社会の拘束をうけない。この前提に立脚しているのが、*The Blithedale Romance* の中で描かれる Blithedale の実験的共同社会である。

Blithedale の共同社会は、従来の社会のあり方に不満をもった人々が、新しいあり方を求めて集ってきたところである。すなわち、ここに集った人々は社会の古びた因襲や桎梏から解放され、古い社会制度のもとで身につけた一切のものをすてさり、さらに、在来社会を支配していた偽りの残酷な原則やプライドをすて、平等と愛を理想とする社会を樹立しようとした。この社会がめざしたものは freedom, equality 及び love だということができる。

このような目標を達成する場所として、田舎の土地が選ばれた訳だが、Blithedale はもちろん都会と異って「自然」と直接接触する位置にあるため、これらの目標は、たとえ「自然」そのものに内在する価値だとは断定できないにしても、「自然」を背景にした時、というか、「自然」の懷に入った時には守られることのできる価値、つまり「自然」の秩序、法則に反しない価値だと考えられたのである。

freedom については、すでに、「自然」の同情を得た Hester や、社会の掟にしばられない自然児の Pearl への言及にも認めることができたが、“the false and cruel principles” や “Pride”<sup>⑥</sup> と対立する equality が「自然」の側につくことは、*The House of the Seven Gables* の Phoebe にも示されている。ずっと田舎に住んでいて「自然」との接触の深かった Phoebe は、pride の高い、貴族的趣向を好む Hepzibah とは対照的に、

平等主義の平民だといわれている<sup>⑭</sup>。また、「自然」と愛とのつながりは、  
“While inclining us to the soft affections of the Golden Age, it seemed  
to authorize any individual, of either sex, to fall in love with any other,  
regardless of what would elsewhere be judged suitable and prudent.”<sup>⑮</sup>  
という語り手 Coverdale の言葉からもうかがえるように、Blithedale の  
目標であるアガペ的愛から、男女間の愛にまで及んだ。

要するに Blithedale に集った人々は、「自然」に則した生活を送ろうと  
して、人工的なものをできるだけさける単純、素朴な生活を計画し、文字  
通りにも、比喩的にも、「自然」と密着した生活を送ろうとした。Cover-  
dale の言葉によれば、その生活は “a simple, natural, and active life”<sup>⑯</sup>  
であって、そこには “rustic simplicity of our new life”<sup>⑰</sup> があった。

このように「自然」と密着した Blithedale を、Coverdale は人間の先  
祖が「自然」のめぐみを満喫して幸福な生活を送ったというギリシア神話  
の Golden age や Arcadia にたとえたり、キリスト教神話の Eden にな  
ぞらえたりし、また、Blithedale の生活を “pastoral” だと何度となく形  
容する。

Hawthorne は *American Notebooks* の中で、Old Manse の時代に  
「自然」との接触が深かったことにふれて、「私の主な心配は野菜のよく繁  
ることを見守ることにあった。……それはまるで人間と自然の間の原始関  
係 (“the original relation between Man and Nature”)<sup>⑱</sup> がとりもどせ  
たかのような<sup>⑲</sup>」と書いているけれども、Blithedale は、さまざまな神  
話や宗教が共通して考えている人間と「自然」との “original relation”  
を、歴史の中であえてとりもどそうとするかのような含みのある企であっ  
た。The *Blithedale Romance* という作品自体に、そのような企の枠組  
があたえられていたともいえる。

Blithedale は結果としては失敗している。それにはもちろん Zenobia や  
Hollingsworth などの人物がからんでいるけれども、「自然」に則してか

かけた equality, freedom, love, simplicity, naturalness などは、皮肉なことに、ことごとく何等かの理由で達成されなかったり、ゆがめられたりしている。そういう皮肉な「自然」のゆがめ方は、作品のはじめからかなり意図的に設定されているが、Blithedale で一夏を過して都会にもどった Coverdale は、ホテルの窓から向いのアパートの一室に住む一家の家庭団欒の様子をみて、「自然」に則した生活を送っていた筈の Blithedale におけるよりもっと美しい「自然」の情景を認めるのである。

“I bless God for these good folks!... I have not seen a prettier bit of nature, in all my summer in the country, than they have shown me here in a rather stylish boarding-house.”<sup>②</sup>

もちろん、Blithedale において起ったことで、「自然」と接したために好ましい変化をとげた面が全くなかったというのではない。「自然」はもともと physical なもの、material なものとしてあらわれている。だからこそ、はじめに述べたように、Hawthorne はそれを spiritualize することによろこびを見出していたのである。Blithedale において「自然」と接することによって大いにさかえたのは、この physical なものであって、Coverdale ははじめ熱を出したがその後たくましい体格となったし、ことに、Priscilla のように都会で貧しい生活を長く送っていたため肉体的に非常に貧弱で、かつ、ある男の術の犠牲になって spirit を意のままにあやつられる Veiled Lady になっていた人物には、「自然」との接触はたいへん結構なことであった。彼女は健康になり、肢体を活潑に動かすよろこびを得たのである。彼女の spirit は Blithedale に来てやっとその居るべき physical な肉体とのつながりを得て、“disembodied spirit”の状態から脱することができた。けれども、Coverdale が Blithedale に来た時にのぞんでいたのは、physical な面の発達そのものではなく、physical なものの spiritualization、たとえば、“spiritualization of labor”<sup>③</sup>などであって、その点では、当初の目的は全然達せられなかったのである。

Blithedale の失敗の原因を最も遠くまで求めると、「自然」と人間の innocence のつながりが浮び上ってくる。先に一言ふれた「自然」と人間の間の“original relation”が可能性をもっていたのは、人間が墮落する前、innocence を喪失する以前のことであって、Arcadia にしろ Eden にしろ、そういうところで可能だった“the original relation between Man and Nature”をとりもどすことは、いかにその関係にノスタルジアを感じても、innocence を失った人間の歴史の中では不可能だといえよう。

*The Marble Faun* の中のあるエピソードでは、この innocence の喪失による人間と「自然」の“original relation”の破壊が比喩的に扱われている。中心人物の一人 Donatello は、タスカニーの田舎の Monte Beni 家に育った人で、「自然」とつながりの濃かった家系（先祖は Arcadia の住人で、その後の子孫もさまざまな形で「自然」と深いつながりをもっている。第26、27章参照）からいっても、また、彼の生いたちから考えても、彼と「自然」とは非常に親しい、近い関係にあった。たとえば、彼が口笛を吹くと、野山の動物達がすぐやって来たというのである。ところが、Donatello がローマに出て来て Miriam を恋し、かつ、Miriam につきまとう男を崖からつき落して殺してしまっ以来、彼と「自然」の親しいつながりは失われ、いくら口笛を吹いても動物達は集ってこない。そのことにふれて、友人の Kenyon が次のように言う。

“We all of us, as we grow older lose somewhat of our proximity<sup>25</sup> to nature. It is the price we pay for experience.”

Kenyon の言葉は、文字通りには、経験を重ね、sophisticate するにつれて、我々は「自然」から遠のき、単純さ、素朴さ、「自然」との一体性を失う、ということの意味しているが、これは、*The Marble Faun* の神話的な枠組の中では、アダムの innocence の喪失と、それに併う「自然」と人間の間の“original relation”の破壊を意味しているといえる。

しかしながら、いかに「自然」との“original relation”がそこなわ

れても、Hawthorne の小説においては、すでに一言のべたように「自然」が人間にとって全くよそよそしい存在となって、人間の運命を蹂躪してしまうというのではなかった。Frank Norris が *The Octopus* (1901) の中で次のように書きたいわゆる自然主義的な自然観は、まだ、Hawthorne にはみられなかった。

There was no malevolence in Nature. Colossal indifference only, a vast trend toward appointed goals. Nature was, then, a gigantic engine, a vast Cyclopean power, huge, terrible, a leviathan with a heart of steel, knowing no compunction, no forgiveness, no tolerance: crushing out the human atom standing in its way with nirvanic calm ....

Hawthorne の「自然」は、Norris の「自然」とは対照的に、人間がたとえその秩序や法則を破って恩恵から遠ざかっても、なおも、人間を人間として扱ってくれると感じられた存在だった。Coverdale が母の image を与えて親近感を表現した「自然」は、*The Blithedale Romance* という作品の context から考えれば多少割引いて考慮する必要があるにしても、人間に対する厳しさと愛を両立させている点で、Norris や Stephen Crane が扱った impersonal な「自然」にはまだ程遠いといわねばならない。

Nature, whose laws I had broken in various artificial ways, comported herself towards me as a strict, but loving mother, who uses the rod upon her little boy for his naughtiness, and then gives him a smile, a kiss, and some pretty playthings, to console the urchin for her severity.

#### IV

さて、このように Hawthorne の小説のあちこちを当ると、必ずしも「自然」の厳密な意味ではないかもしれないが、独自の存在としての「自

然」に与えられている特色、あるいは、「自然」にうけ入れられる価値、といったものをいくつか指摘することができる。紙数の関係で、具体的な例をこれ以上あげるとは省略して、次の表のように、Hawthorne の小説における「自然」の性格、特色を簡単にまとめてみることにする。

Nature		Anti-Nature
Matter, Earth, the physical	}	Spirit, Soul, the spiritual
Instinct, Impulse		Reason
Emotion, Feeling		Intellect, Mind
Animal		Human
Amoral, Unreligious		Moral, Religious
Wild, Primitive		Gentle, Cultured
Natural, Rustic		Artificial, Refined
Active, Practical		Inactive, Unpractical
Simple, Innocent		Complicated, Experienced, Sophisticated
Freedom		Convention, Rule
Equality		Pride, Aristocracy
Benevolence, Sympathy, Motherly — Malevolence, Indifference		
Love — Curse		
Fertility — Sterility		
Proportion — Disproportion		
Order — Disorder		
Regularity — Irregularity		
Beauty — Ugliness		
Joy — Sorrow		

右側には参考のために、左側の各々の反対、もしくは、対になる概念を、かりに“Anti-Nature”としてあげておいた。また下の方に Benevolence, Sympathy ではじまるいくつかの概念があるが、線でつないだこれ等の反対概念は、しばしば右側の“Anti-Nature”に付随し、さらに何等かの moral evil の比喩としてあらわれてくることが多い。しかし、それでもこれらは「自然」の一面をあらわしているものであるから、左側によせて並べておいた。

この表に並んでいる概念の一つ一つには大きな思想史的背景がからんでいて、たとえば、Reason は Hawthorne にあっては“Anti-Nature”に属しているが、Cooper までさかのぼると Reason はすでに Nature の側につき、さらにこの系譜はルネッサンス時代にまでさかのぼってゆくことができる。けれども、この小論の当面の目的は、自然思想を論じるのではなくて、このような概念で性格づけられる「自然」が、小説そのものにおいて、人物や作品の意味にどのようにからんでいるかということを例証することにある。

このどちらかといえばロマンチックな自然観を示している表には、一見して明らかなように、「自然」の厳しさ、雄大さ、崇高さが加えられていない。「自然」のこのような面は、Cooper や Melville の小説ではふんだんに認められるものであって、Hawthorne の作品でも、小説以外のもの、たとえば、紀行文風のエッセイ、短篇小説、Notebooks などでは時たま認めることができる。ところが、小説では「自然」の厳しさ、とくに人間にとって苛酷な自然現象はあまり強調されていない。たとえば、*The Scarlet Letter* では物語が七年間にまたがっているが、その間、New England の厳しい寒さの冬をどのように Hester と Pearl が過したかについては、全く言及がない。また、その他の小説において「自然」の情景が描かれても、雄大さ、崇高さが強調されることは滅多にない。もちろん、小説における Hawthorne の主要な関心は、「自然」そのものを多角的に描くことではなく、人間の spiritual な問題、moral な問題を追究することであって、「自然」に対する関心はそういった人間の問題とのつながりのもとでたもたれたのである。

「自然」と人間のつながりについてはあとで少しく触れるが、先の表では、「自然」の側に属するものとその対になるものとの両立関係を得ることが、人間のあり方に直接かわりあってくるとされているものを、互に二重線でつないでおいた。すなわち、表の上部にある二重線でつながれた



ものは、“The Birthmark”中で言及している“composite man”<sup>㉔</sup>としての人間における physical な面と spiritual な面の両立，“Ethan Brand”<sup>㉕</sup>でのべている感情面と知性面の“counterpoise”を示している。

この表は、先に触れたように、小説中に描かれる「自然」や、「自然」とのつながりを持った人物や出来事から、「自然」の特色、もしくは、「自然」に受け入れられる価値と考えられるものを、様々な角度から少しづつ抽出して並べたものである。この表を右側の反対概念、対概念を加えた上であらためて逆に、人物なり出来事に投影してみると、「自然」の持つ意味が、小説中の人間のドラマに織込まれてくる様相がかなり明らかになり、さらに、この「自然」の意味を生かすように external nature の比喩的表現が用いられていることも明らかになると思う。以下、若干の典型的な人物に限って、これをごく簡単に眺めてみよう。

表の左側のほとんどの項目にあてはまる人物として、*The Scarlet Letter* の Pearl がいる。彼女の遊びや生活態度をみると、野性的、本能的、感情的で、行動は活潑で、先に一言触れたように、社会のしきたりや慣習に従わない freedom の持主であって、生れた時から spirit, soul に問題があり、moral sensibility を持っている様にもみえない。Pearl が人々の眼にどのような存在として映るかは、先に引用した Chillingworth と Dimmesdale の会話がよく示している。Pearl がほとんど全面的に先程の表の“Nature”の側につくものをそなえた“Pro-Nature”の人物であることは、彼女がさまざまな自然物の image で比喩的に表現されることや（たとえば、野生のバラ、鳥、日光、焰、悪疫）、野生の「自然」との間に親近感があるとされていること（たとえば、小川に話しかけたり、浜辺の鳥に誤って石をぶつけて悲しんだり、また、森の動物達も Pearl に親しみをみせた、等）などによっても裏付けられている。

Pearl のこの Pro-Nature 性は、もともと両親が Puritan の掟を破って、

passion という「自然」の側につくものに身をまかしたことに源を発している。Pearl が Wilson の間に答えていった気紛れな、口から出まかせの表現は、Pearl のこの Pro-Nature 性を裏書している。すなわち、Pearl は、自分は誰につくられたというものではなくて、母が牢獄の門のそばに生えている野バラからつみとったものだと言うのである。<sup>30</sup>

*The Marble Faun* の Donatello は、出生こそ Pearl と異ってはいるが、「自然」の側につく特色を沢山もっている Pro-Nature の人物で、Pearl と同じく、社会的観点からみれば不可解な性格があると言われている。言うまでもなく、その不可解さは慣習や掟にしばられない「自然」の freedom のあらわれである。たとえば、Donatello について次のように書かれている。

It was difficult to make out the character of this young man. So full of animal life as he was, so joyous in his deportment, so handsome, so physically well-developed, he made no impression of incompleteness, of maimed or stunted nature. And yet, in social intercourse, these familiar friends of his habitually and instinctively allowed for him, as for a child or some other lawless thing, exacting no strict obedience to conventional rules, and hardly noticing his eccentricities enough to pardon them. There was an indefinable characteristic about Donatello that set him outside of rules.<sup>31</sup>

この文章は、典型的な Noble Savage の特色をそなえた Donatello を描き出しているけれども、Hawthorne は Cooper や初期の作品における Melville と異って、決して、Noble Savage を賞揚するのではない。Donatello の焦点は、彼の Noble Savage 的な性格にあるのではなくて、彼が動物的ともいえる本能的嫌悪感と直観的衝動から殺人を犯し、罪の苦しみと insulation を経験して、Noble Savage から moral sensibility をもつ人間へと変貌してゆくところにある。<sup>32</sup>

Pearl も、作品の最後では人間的な感情をもつ人物へと成長するが、Pearl の焦点は、むしろ、人間的でない amoral な存在であることによって、親の spirit とか moral sensibility に刺戟を与えたり、働きかけたりする役目にある。作中の言葉をかりると、Pearl は “spirit-messenger”<sup>③</sup> としての役目を果すのである。従って、Donatello に半動物的な Faun の image が与えられたり、hound や pet dog, chicken が比喩的表現として用いられるのに反して、Pearl には imp, fairy, elf, sprite, nymph-child, infant-dryad といった、「自然」の精と考えられる存在の image が無数に用いられている。ただし、Puritan 達はこの「自然」の子である Pearl を彼等の観点から悪の子と見做して、“a demon offspring”<sup>④</sup> と考えている。

ところが、このような Child of Nature と呼んでもよいような人物とは対照的に、*The House of the Seven Gables* の Pyncheon 家の人々は、先程の表の左側の “Nature” 側につくものをほとんど持っていない<sup>⑤</sup>。この一家の人々は、先祖の Colonel Pyncheon 以来、いわゆる New England aristocracy の一角をしめていて、pride が高く、artificial なもの、refine されたもの、sophisticate されたものを好む傾向が強い。そして、先祖の Colonel が七破風の家がたっている土地を手に入れたいきさつや、その後の子孫が、行ってみたこともない Maine 州の土地の所有権を主張しようとする様子から考えれば、この一家に伝わる Maule の呪いは、この一家と「自然」との関係のゆがみを指摘しているかのようなのである。「自然」との関係では、この “Anti-Nature” の Pyncheon 家は、先祖が Arcadia の住人だったという Donatello の Monte Beni 家と極めて対照的である。

この小論のはじめの方で引用したように、Pyncheon 家には「自然」のめぐみがうまく受け入れられない。先程の表の下の方にある、「自然」の醜い、豊かでない、秩序のない面ばかりがこの一家につきまってくる。たとえば、家の横手には醜い午旁が生いしげっているし、庭に咲いている

花はよくみると中心部がかれているし、庭の泉の水は、Colonel Pyncheon がこの土地をうばって以来、それまで良かった水が硬水に変じ、塩分をふくむようになってしまっている。また、Pyncheon 家の人々は子孫の数が代々増すこともなく、今日では僅かに数名がいるだけである。

Pyncheon 家の残った人々は、作品の最後で都会の七破風の家を出て田舎へ引越すことになるので、当然のことながら「自然」と直接交ることによる彼等の変化が予測されるけれども、この一家は、Chillingworth と並んで、Anti-Nature と「自然」の醜い面とが結びついた典型的な例として指摘することができる。

このような、Pro-Nature の Pearl, Donatello, と Anti-Nature にかたよった Pyncheon 家の人々に対して、そのどちらにもかたよらず、適当に両者の融合を果し、“composite”とか“counterpoise”といった両立関係をそなえた人物がいる。それは、Pyncheon 家の遠縁の一員ではあるが、七破風の家に住まずに長らく田舎に住んでいた Phoebe である。彼女も Pearl と同じように、さまざまな自然物の image によって描写されている。その image には、たとえば、花、鳥、微風、泉、日光、果物の木等がしばしば用いられているが、Pearl や Donatello と異って、野生のもの、原始的なもの、自然悪に関するもの等は何もない。また、Phoebe が行けば Pyncheon 家の庭の花でも中心部の枯れていない美しい花がみつかる。他の Pyncheon 家の人々と異って、Phoebe には「自然」の醜い面は附随しない。彼女が美しい少女であることは言うまでもない。

Pearl が amoral で wild で instinctive で emotional で、社会の拘束にしばられない freedom の持主であったのに対して、この Phoebe は、感情に走ることもなければ、wild でもなく、社会の慣習を守り、お祈りをし、教会にも行く。それでいて彼女の人となり、性格、行動の上では、「自然」の側につく Simple, Natural, Active, Innocent などや、Equality,

Love, Beauty, Joy などが指摘できる。このような Phoebe について、Hawthorne は次のように書いている。

She impregnated it [the pure air] ... not with a wild-flower scent—for wildness was no trait of hers—but with the perfume of garden-roses, pinks, and other blossoms of much sweetness, which nature and man have consented together in making grow, from summer to summer, and from century to century. Such a flower was Phoebe ....<sup>⑭</sup>

ここに言われているように、Phoebe はいわば「自然」と人間の合作のような人物であって、「自然」とのつながりを失わないと同時に、moral sensibility をもった人間としての条件をもそなえた、ある種の理想的人間像だといえる。Hawthorne がしばしば肯定的な意義を認めた「家庭」、「暖かさ」、「現実性」が、Phoebe に与えられたのも当然であろう。Hawthorne は Phoebe を描いて次のように書いている。

Phoebe's presence made a home about her .... She was real! Holding her hand, you felt something; a tender something; a substance, and a warm one ....<sup>⑮</sup>

ところが、たとえ Phoebe がこのように野生的、原始的な「自然」にかたよらず、また、Anti-Nature にもかたよらず、かつ Hawthorne の小説ではまれなほど肯定的な価値を与えられてはいても、彼女は決して Hawthorne の想像力の輝きを代表する人物とはいえない。Hawthorne の小説に出てくる代表的な人物で、しかも、“Nature”, “Anti-Nature” の観点からみて興味深い人物は、いわゆる Dark Lady、つまり *The Scarlet Letter* の Hester, *The Blithedale Romance* の Zenobia, *The Marble Faun* の Miriam である。この三人については、すでに多くのことが論じられているが、Nature, Anti-Nature の観点から論じられたことは無いようである。<sup>⑯</sup>

この三人には、Child of Nature をもじって、Lady of Nature と呼んでもよいような一面がある。たとえば、physical な点で三人ともほとんど非のうちどころがないほど美しく、濃艶ともいえる魅力をたたえており、共に官能的、情熱的で、三人とも「東洋的」という形容が与えられている。<sup>④</sup>なかでも、Henry James<sup>⑤</sup>が“the complete creation of a person”とほめている Zenobia<sup>⑥</sup>は、完全ともいえる美しさをそなえていて、「自然」そのものが自らの産物を誇らしく思うほどだといわれている。さらに、この三人はともに行動の上で active で、因襲やしきたりにとらわれない freedom を身上としている。

しかしながら、このように「自然」の側につく一面を充分すぎるほどに持っている反面では、三人とも Anti-Nature の極端なものをそなえている。つまり、三人とも決して simple, rustic でなく、趣味の上では高度に洗練された、artificial なものを好み、芸術的な才能がある。Hester は針仕事、ことに豪華な刺繍の才能があり、Zenobia は俳優になれそうなほどのすばらしい演技力があり、Miriam はローマにいて絵をかくている。さらに、三人とも、家柄からいっても、態度からいっても、貴族的なところがあって自負心が強く、時には、高慢ともいえる態度を示すことがある。

このように、Pro-Nature, Anti-Nature の両極端を合せもっている三人は、Phoebe と異って、“composite”並びに“counterpoise”で示される両立関係を得ていない。Hester も Miriam も、それぞれ作品の最後では大きく変貌するけれども、共にその性格に原因する罪に関係したし、Zenobia は異母妹の Priscilla と三角関係に陥り、彼女を裏切る行為をして、最後には自殺する。Zenobia においては、Pro-Nature と Anti-Nature の両極端が、いわば一種の自己矛盾となって、自壊作用を起したと考えることができる。彼女は、理論的には、感情のみに依存しない女性のあり方を唱え、女性の地位向上を主張しながらも、結局 Hollingsworth への愛に流され、Priscilla を裏切って彼女を再び Westervelt の手にゆだね、

Veiled Lady にさせてしまった。Blithedale にいた時、Zenobia は豪華な花の髪飾りをつけ、それによって Eve にもたとえられた彼女の申し分ない美しさは一そうひきたっていた。けれどもこの花は、Blithedale の野原に咲く花ではなく温室で人工的に咲かした花であって、Zenobia は加工された「自然」(Anti-Nature)によって、「自然」に則することの完全性(Pro-Nature)を強調しようとしていたといえる。このような Zenobia がいるため、Blithedale の企そのものまでが非現実的なつくりごと——Coverdale の言葉をかれば、“an illusion, a masquerade, a pastoral, a counterfeit Arcadia”<sup>⑩</sup> になってしまう。彼女が街にもどって Priscilla を再び Veiled Lady にした時、Anti-Nature でありながらも Pro-Nature でもあろうとする Zenobia の矛盾をあからさまに示すように、彼女の髪飾りは全く人工的な花、すなわち、宝石の花髪りに変わっていたのである。<sup>⑪</sup>

*The Blithedale Romance* の終り近くで、この作品の語り手 Coverdale は、自殺したため魂を破滅した Zenobia を「自然」は涙も流さずに受け入れ、Zenobia の“heart”から生えてくる雑草に満足しているように思える、と語っている。

While Zenobia lived, Nature was proud of her, and directed all eyes upon that radiant presence, as her fairest handiwork. Zenobia perished. Will not Nature shed a tear? Ah, no! She adopts the calamity at once into her system, and is just as well pleased, for aught we can see, with the tuft of ranker vegetation that grew out of Zenobia's heart, as with all the beauty which has bequeathed us no earthly representative, except in this crop of weeds.<sup>⑫</sup>

ここに言及されているような醜い雑草は、Hawthorne の小説においては、そのほか、Puritan の牢獄、Chillingworth、さらに、先に触れた七破風の家などに関連して、spiritual な面での疑問、もしくは、moral evil の比喩として用いられている。このような雑草に限らず、「自然」の醜い面が

現れるとか、「自然」のめぐみや同情を得ない場合なども、いずれも、精神的、道徳的な悪やゆがみと関連して描かれるのであるが、それでもいさなり機械的な比喩的表現となるのではなくて、「自然」の側につくものと  
の両立関係の破壊とか、Anti-Nature が必ず前提となっているといえる。  
その逆に、「自然」のめぐみや豊かさが与えられる場合には、その対象が  
全くの Pro-Nature であるか、もしくは“composite”とか“counter-  
poise”の関係をもっている場合に限られるのである。

## V

この小論では、Hawthorne の小説における「自然」の意味、「自然」に  
うけ入れられる価値を概観して、その反対概念、対概念と共に、若干の典  
型的な人物に投射したのであるが、他の人物や出来事についても、程度の  
差こそあっても、Pro-Nature, Anti-Nature の関係は認められるし、さ  
らに、setting そのものが、「自然」とつながる意味を持っていることはい  
うまでもない。このことは、Blithedale や、*The Scarlet Letter* の森、  
*The Marble Faun* の Villa Borghes の庭園やタスカニーの田舎の Monte  
Beni 家の土地のように、「自然」を setting とした場合のみならず、*The  
Scarlet Letter* の Boston や、*The Marble Faun* の Rome のような、  
Anti-Nature を特色とする setting についてもいえる。*The Marble Faun*  
では、Rome の“the mouldy gloom and dim splendor”に言及がなさ  
れて次のように書かれている。

Nature has been shut out for numberless centuries from those  
stony-hearted streets, to which he [Donatello] had latterly grown  
accustomed; there is no trace of her, except for what blades of  
grass spring out of the pavements of the trodden piazzas, or what  
weeds cluster and tuft themselves on the cornices of ruins.<sup>48</sup>

このように言われた Rome が、Anti-Nature のさまざまな性格を多くそ



なえて、人物なり出来事の意味にからんでいることは言うまでもない。

Hawthorne は決して「自然」を否定するのではないが、そうかといって、「自然」を全面的に憧憬するのでもない。Hawthorne の「自然」に対する関心は、先にも触れたように、人間の spiritual な問題、moral の問題とのつながりのもとでたもたれている。Hawthorne にとっては、人間が spirit だけの存在でなく physical なものをも持合せているが故に、人間と「自然」のつながり方が問題になるのである。人間の側からこれをみれば、すでに上に眺めたように、一種の理想的人間像である Phoebe は、決して野生的、原始的な「自然」と結びつかず、また、そうかといって、「自然」を完全に無視するのでもなくて、人間と「自然」の合作である庭園のバラやナデシコの花にたとえられていたのであるが、「自然」について Hawthorne が理想的と考えた情景もまた、決して野生的なものではなくて、少くとも *The Marble Faun* で扱っている限りでは、次に引用するように、人間と「自然」の時間をかけた合作であった。

These wooded and flowery lawns are more beautiful than the finest of English park-scenery, more touching, more impressive, through the neglect that leaves Nature so much to her own ways and methods. Since man seldom interferes with her, she sets to work in her quiet way and makes herself at home. There is enough of human care, it is true, bestowed, long ago and still bestowed, to prevent wildness from growing into deformity; and the result is an ideal landscape, a woodland scene that seems to have been projected out of the poet's mind.<sup>④</sup>

これと同様の、時間をかけた人間と「自然」の合作の風景は、*English Notebooks* の中でも美しいとされている。<sup>⑤</sup> 従って、「自然」と人間の “original relation” にもどることは、innocence を喪失した post-lapsarian の

人間にとっては根本的に不可能かもしれないが、Hawthorne は、それでも、というよりは、“original relation” が失われたからこそ、「自然」と人間のつながり方を「自然」の側についても、また人間の側についても問題にするといえるのである。もちろん、個々の小説によって、とらえられている「自然」の性格が多少とも異っているので一概にはいえないが、たとえ「自然」そのものを多角的に描くことが Hawthorne の関心でなくとも、先に一部の例をとりあげて眺めてきたように、「自然」が人間とのつながりのもとで小説全体の意味の構造の重要な一部になっていることは否定できない。

付記 *The Blithedale Romance* と *The Marble Faun* における「自然」については、別の機会に詳細に論じることにする。

#### 註

この小論の骨子は、1966年5月28日上智大学において催された日本英文学会第38回大会で発表した。

- ① Hawthorne を論じた書物の多くは、文中のどこかでこの問題に一言ふれているけれども、いずれも casual reference の域を出ていない。まとまったものでは、未出版の Ph. D. 論文 James Ragan, “Nature in Hawthorne’s American Novels” (University of Notre Dame, 1955), と David B. Kesterton, “Nature in the Life and Works of Nathaniel Hawthorne” (University of Arkansas, 1964) の二つがある。
- ② Randall Stewart ed., *The American Notebooks by Nathaniel Hawthorne* (New Haven: Yale U. P., 1932), p. 189.
- ③ “The Custom House,” *The Scarlet Letter* (“The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne”; Ohio State U. P., c 1962), p. 26. Hawthorne の小説からの引用は、*The Marble Faun* を除いて、この Centenary Edition による。
- ④ Perry Miller, *The New England Mind; The Seventeenth Century* (Boston: Beacon Press, 1961), p. 213.
- ⑤ H. H. Waggoner は、*The Scarlet Letter* の明暗の image に言及して、そのあらわれ方に三通りあることを指摘している、1. 文字通りに使われる純粋に感覚的な image. 2. 文字通りに受けとらねばならないが、同時に明らかな

象徴的価値がある image. 3. 文字通りに受けとれず、象徴的価値のみがある image, の三種である. Waggoner はこれを、それぞれ “pure”, “mixed”, “drained” と呼んでいる. 自然物の image のあらわれ方もこれと全く同じと見做してよい. ここで言っているのは “mixed” image と “drained” image が非常に多いことである. (Cf. H. H. Waggoner, *Hawthorne; A Critical Study* [Cambridge, Mass.: Harvard U. P., 1963], pp. 130-2)

- ⑥ 「自然」の観点からの作品論としては、すでに “Hawthorne's *The House of the Seven Gables* and Nature” (同志社大学人文学会『人文学』75号〔昭和39年1月〕) を発表した.
- ⑦ *The Scarlet Letter*, p. 48.
- ⑧ *The House of the Seven Gables*, p. 28.
- ⑨ *Ibid.*, p. 148.
- ⑩ *The Scarlet Letter*, p. 48.
- ⑪ *Ibid.*, p. 195.
- ⑫ *Ibid.*, pp. 202-3.
- ⑬ 「『緋文字』の構造と意味」(同志社英文学会『主流』23号〔昭和36年11月〕) 参照.
- ⑭ *The Marble Faun or The Romance of Monte Beni* (“Riverside Edition”; Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1883), p. 24.
- ⑮ *The Scarlet Letter*, p. 134.
- ⑯ *The Blithedale Romance*, p. 19.
- ⑰ *The House of the Seven Gables*, pp. 80-81.
- ⑱ *The Blithedale Romance*, p. 72.
- ⑲ *Ibid.*, p. 129.
- ⑳ *Ibid.*, p. 22.
- ㉑ *The American Notebooks*, p. 154.
- ㉒ *The Blithedale Romance*, p. 151.
- ㉓ *Ibid.*, p. 6.
- ㉔ *Ibid.*, p. 65.
- ㉕ *The Marble Faun*, pp. 288-289.
- ㉖ Frank Norris, *The Octopus* (Garden City, N. Y.: Doubleday and Company, 1954), p. 286.
- ㉗ *The Blithedale Romance*, p. 62.
- ㉘ “The Birthmark,” *Mosses from an Old Manse* (“Riverside Edition”;

- Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1883), p. 62. 本文中でふれた Veiled Lady の Priscilla はこの “composite” 関係が捐われた例である。
- ②⑨ “Ethan Brand,” *The Snow-Image and Other Twice-Told Tales* (“River-side Edition”; Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1883), p. 495. “counterpoise” を失った例は Ethan Brand をはじめ, Chillingworth その他 沢山ある。
- ③⑩ *The Scarlet Letter*, p. 112.
- ③⑪ *The Marble Faun*, pp. 28 f.
- ③⑫ 「Hawthorne における『孤独』の問題——Insulation について」(日本英文学会『英文学研究』第42巻2号〔昭和41年3月〕)参照。
- ③⑬ *The Scarlet Letter*, p. 180.
- ③⑭ *The Marble Faun*, p. 28.
- ③⑮ *The Scarlet Letter* p. 99.
- ③⑯ Pyncheon 家の人々については “Hawthorne’s *The House of the Seven Gables* and Nature” で論じた。
- ③⑰ *The House of the Seven Gables*, p. 143.
- ③⑱ *Ibid.*, pp. 140-141.
- ③⑲ Hawthorne を論じた書物では、もちろんこの三人は何等かの形でとりあげられているが、とくに Dark Lady を論じて興味深いのは Philip Rahv, “The Dark Lady of Salem,” *Image and Idea* (“New Directions Paperback”; Norfolk, Conn.: New Directions, c. 1957), および, F. J. Carpenter, “Puritans Preferred Blondes: The Heroines of Melville and Hawthorne,” *NEQ*, Vol. IX (June, 1946) である。
- ④⑩ たとえば Hester については, “She had in her nature a rich, voluptuous, Oriental characteristic.” (*The Scarlet Letter*, p. 83.) といわれており, Zenobia の名は本名でなく、ある東洋の女王 (Septimius Zenobia, シリア女王 267—272) からとったペンネームだったが、彼女の女王的态度に似つかわしかったのでそのまま通称として用いられたという (*The Blithedale Romance*, p. 13). また, Miriam については, “a certain rich Oriental character in her face” (*The Marble Faun*, p. 38) といわれている。
- ④⑪ Henry James, *Hawthorne* (“Great Seal Books”; Ithaca, N. Y.: Cornell U. P., 1956), p. 106.
- ④⑫ *The Blithedale Romance*, p. 21.
- ④⑬ Zenobia にあっては Hester, Miriam とくらべて Pro-Nature, Anti-Nature

の対立が著しい。たとえば、彼女はすばらしい肢体の持主であるばかりでなく、毎日身体の運動を欠かすことができないほどであったが (Pro-Nature), Practical なことは下手で, Coverdale に作ってやった gruel はひどい代物だった。Coverdale はそのことについて, “Nature certainly never intended Zenobia for a cook. Or, if so, she should have meddled only with the richest and spiciest dishes, and such as are to be tasted at banquets, between draughts of intoxicating wine.” (*The Blithedale Romance*, p. 48) といっている。aristocratic で、豪華な artificial なことはできるかもしれないが、身近な practical なことができず、簡単な素朴な料理さえもできない点で, Zenobia は *The House of the Seven Gables* の Hepzibah と同じく, Anti-Nature である。

④④ *The Blithedale Romance*, p. 244.

④⑤ *The Marble Faun*, pp. 94-95.

④⑥ *Ibid.*, p. 91.

④⑦ たとえば次のような一節がある。

Kensington Gardens form the most beautiful piece of artificial woodland and park-scenery that I have ever seen.... in all directions there are vistas of wide paths among noble trees, standing in groves, or scattered in clumps; everything being laid out with free and generous spaces, so that you could see long sheets of sunshine among the trees, and there was a pervading influence of quiet and remoteness. Tree did not interfere with tree; the art of man was seen, conspiring with Nature, as if she and he had consulted together how to make a beautiful scene, and had taken ages of quiet thought and tender care to accomplish it. (Randall Stewart ed., *The English Notebooks by Nathaniel Hawthorne* (New York: Russell and Russell Inc., 1962), pp. 230-231.)